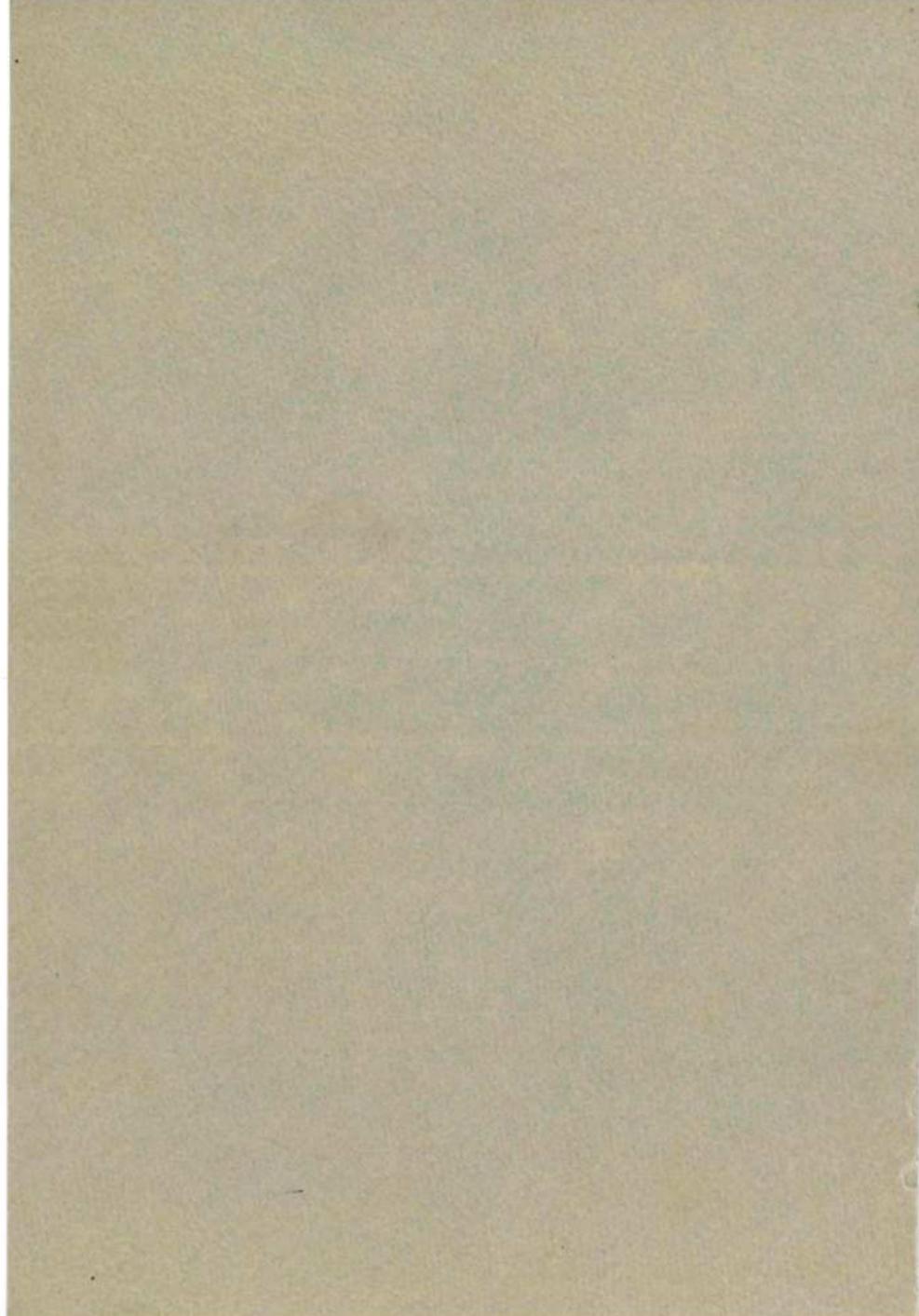


掛川市埋蔵文化財調査報告書

1966

掛川市教育委員会編



掛川市本村横穴墳群・本村古墳（第1号・第2号）

発掘調査概報

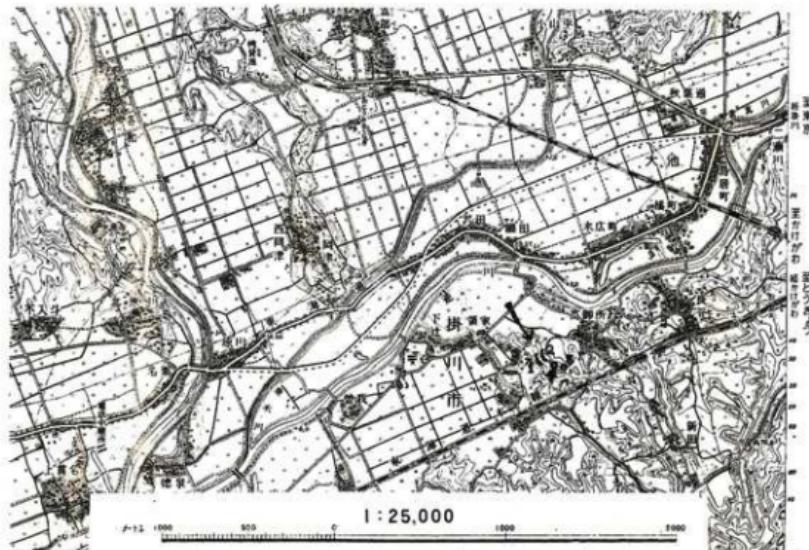
—東名高速道路建設に伴う発掘調査—

掛川市本村横穴墳・本村古墳(第1号・第2号)

発掘調査概報

—東名高速道路建設に伴う発掘調査—

1. 所在地 挂川市高御所字東昭ケ谷 1505 番地
" 領家字厘敷腰 805 番地—2—1・805 番地—2—2
" 高御所字南坪 1485 番地・1487 番地—1
2. 調査期間 昭和41年7月16日から昭和41年8月15日まで
3. 調査主体 日本道路公团
4. 調査者 静岡県教育委員会・掛川市教育委員会
5. 発掘担当者 向坂鋼二(執筆者・向坂鋼二・平野和男)
6. 参加者 平野 和男・山村 宏・大谷 純仁・尾藤 晓・宮本 豊彦・増井 義昭・大崎 長夫・植松 章八・鶴 竹秋・外山 和夫・平野 啓郎・後藤 武蔵・池田 純・田端 勉・鈴木 忠司・西田 正弘・寺田 和夫・柴田 稔・安達 庄三・駒宮 史朗・松浦 哲二・黒田勝久・



本村古墳位置図 1. 本村横穴墳群A群 3. 本村古墳第1号
2. " B群 4. " 第2号

前川ふさゑ・掛川東高校郷土研究部・磐田南高校郷土研究クラブ・浜松女子商業高校社会科クラブ・誠心高校郷土研究クラブ・中道工業高校郷土研究部・横須賀高校郷土研究クラブ・磐田北高校社会科クラブ・袋井商業高校社会科クラブ・掛川西高校郷土研究部

調査の概要

I. 経過

7月16日、関係者一同、横穴墳の前に集合して、仏式による慰霊祭を行ない調査本部を設営したあと、ただちに調査を開始した。地形測量は縮尺100分の1とし、20m方眼のトラバースを組むことから作業開始。発掘調査は、後に第2号墳と命名した横穴墳より北側の斜面に、未確認の横穴墳があるかないかを検討することから作業を始めた。

その結果、第2号墳の北に隣接して未開口の1基を発見したので、これを第1号墳と命名し、以下南へ順次2号墳から8号墳までとした。

発掘調査は、当初以上の8基全体について実施する計画であったが、第1図に明らかなように第5号墳と第6号墳は用地外になったし、第7号墳と第8号墳は玄室の奥が一部用地内に入るとはいえ技術的には保存し得ることが判ったので、残りの4基（第1号墳～第4号墳）だけの調査にとどめることとなった。ところが7月20日になってこれら8基の存する丘陵の反対側斜面つまり東斜面において別グループの横穴墳を発見したのである。そこで先の方をA群、後に発見された方をB群と呼ぶこととした。B群は発見当初5基開口しており別に少なくとも1基の存在が想定できた。

B群の調査は7月25日から着手した。最初前庭部の調査を進め、次第に横穴墳の入口が並ぶ線へ掘り進めて行く内にB群は7基からなることが確認された。そこでこれらの横穴墳に南から北へ順次第1号墳から第7号墳までと命名したのである。

本村横穴墳群の調査がなかばを過ぎた頃周辺の踏査を実施した。それ以前に本村B群横穴墳の真南の丘陵頂部が話題になっていたのでまずここから踏査を始めたところそれは明らかに円墳であることが確認された。そしてさらにその南側の頂も古墳である公算が強かった。そこで密生して視界をさえぎっていた雑木を伐採し始めたのである。こうして樹木を取りはらって見るとこれも明らかに円墳であることが確認された。そしてこれには本村第1号墳、北側の小さい方の円墳には本村第2号墳と命名されたが、いずれも東名高速道路建設予定地内に入っていた。

このことは掛川市教育委員会を通じて静岡県教育委員会へ連絡され、調査方法について検討がなされた結果、本村横穴墳群の調査に一部併行しても継続的に調査体制を組むということになった。

最初まず地形測量から作業を始めた。この間椎木の伐採を統けて丘陵の姿を露呈することに努めた。

発掘作業は第2号墳から開始した。

第2号墳はわずかばかりの封土を取り除いても主体部は発見されず地盤の固い粘土層に掘り込まれた巾80cm・長さ335cmの土塗が発見され、底面から鉄錠らしい鉄製品を発見しただけで発掘作業は終った。

第1号墳の調査は表土除去中に早くも須恵器と土師品の破片が出土し主体部の浅いことを想わせたが、墳頂下35cm~50cmにかけて土師器・管玉・小玉・鉄錠・直刀・刀子等の副葬器が発見された。これら副葬品の発掘・計測・撮影を一通りしました。第2号墳の土塗状の主体部を調査した我々としてはここまで調査終了とするわけには行かなかった。そこで引き続きこれら副葬品群の下まで調査を進めたのである。その結果、中央部においてやはり基盤の粘土層を掘り込んだ土塗状の主体部が二つ発見された。巾広く短かい主体部の脇に接して細長くて浅い副主体が並行して掘り込まれていたのである。

以上A群の4基とB群の7基、円墳2基が今回我々の調査の対象となったわけである。

II. 概 要

A 地 形

東名高速道路が東海道本線と新幹線を東から西へ横断して掛川市領家へ向う丘陵上に本村横穴墳群は位置している。

掛川市の南方には小笠山塊がひろがり、第三紀鮮新層群を基層として洪積世の砂礫層群から成っている。そして基層をなす鮮新世の砂と粘土の互層は東へ高くなっているために、この本村横穴墳群の占地する領家や高御所の丘陵地帯にはいたるところにその露頭を見せている。いうまでもなくこの粘土層が横穴墳掘削の自然的条件の一つなのである。

本村横穴墳群が所在する丘陵は地形的には小笠山塊の北麓に突出した丘陵地帯の一枝丘をなし、北から西にかけて逆川の作った肥沃な沖積平野をひかえている。この付近一帯は遠江でも有数の「高御所横穴墳密集地帯」であって現在でも百余基を算える。

丘陵は一般的にいって浸蝕の進んだやせ尾根で各所に瘤状の頂部を残している。本村古墳はそうした瘤状の頂部を最も有効に利用している。したがって自然丘と思われているものの中には古墳に利用されたものがかなり含まれていると考えなければならない。

第1号墳からは北と南に水田地帯を望むことができる。逆に見ればその水田地帯からこの古墳は仰ぎ見ることができたということになろう。ところが第2号墳からは北側の狭い谷水田しか望めない。このことは古墳の後背地を考えるうえの参考になるかも知れない。

B 遺 踪 概 要

1. 本村横穴墳群

〔A 群〕

第1号横穴墳 未開口であったのを今回断面探索によって発見したものである。先ず畠の断面にU字状の黒色土の落ち込みが現われこれを掘り進めたところ、巾と深さ共に約1mの溝が東名用地内において4.5mの長さにわたり確認された。この溝は更に1~2m延びていたと推定される。溝底は15度前後のかなり強い傾斜をもって上昇し、そのつきあたりに円礫による閉塞部がある。

閉塞石の高さは溝底から95cmで、この部分の天井部は開墳の時こわされたものと思われるが、ほぼこの数値によって天井部（つまり羨道部の高さ）を復原し得る。

羨道部は最も狭い所で巾80cm・長さは中軸線上で85cmを測る。注目すべきは両壁に縦に切り込まれた巾15cm・深さ数cmの溝の存在である。この溝は不明瞭ながら羨道部底面にも及び、更に羨道外へ続く排水溝となっている。

玄室は巾2.7m・奥行1.75mの大きさで、梢円形というよりも小判形に近い平面形をしている。断面はいずれもとってもアーチ状をなす。つまり天井はドーム状を呈しているわけである。しかし天井部も側壁部も極めて荒削りでいたるところにノミ痕を残している。天井高は1mである。

羨道部の天井が壊されていたために玄室内には厚く土砂が流入していたが副葬品はほぼ原位置に遺存していた。その配置状態は第2図のとおりである。すなわち須恵器（脚付壙1・蓋壙2組）が向って右側壁寄りに、土師器（壙1・壙1）と須恵器壙が左側壁に接して、玉類（勾玉8・管玉2・切子玉7・丸玉2・小玉20）と鉄錆が向って左寄の奥に、それぞれまとめて発見されたのである。

また閉塞前の溝（これを墓道と仮称する）の底からは土師器の高壙3・壙2・鉢1が並んで出土したことも付記しておく。

第2号横穴墳 本墳は調査を始める前の聞き込み調査によって掛川市内のある中学生によつて盗掘されていることを知っていた。発掘を進めたところ玄室内は床まで掘り凹めるようなすさまじい盗掘の痕跡が残っていた。閉塞石も1~2段、それも部分的にしか遺存しなかった。

第1号墳と同様本墳も巾1.2m・深さ約1m・長さ4.5m（推定7m）の墓道とこれをのぼりつめたところに掘り込まれた羨道と玄室から成っている。

羨道部は巾90cm・高さ90cmの断面略方形をなす。羨道の長さは53cmでこの部分に閉塞石の一部が遺存していた。羨道部には両側壁に巾15~20cm・深さ10~15cmの溝が垂直に刻まれている。この溝は底面に及び玄室からの排水溝（巾10cm・深さ10cm）と十文字に交叉する。これを第1号墳にも認められたのと同じ施設として注目される。

玄室は巾2.5m・奥行2.3mの隅丸方形に似た平面形をとっている。天井はドーム状を呈し、高さ1m、断面はアーチ状をなす。第1号墳と同様加工は粗雑でノミ痕を残している。

出土品で原位置を保つものは皆無であった。

第3号横穴墳 本墳も盗掘を受けていたのであろうことは予想されていた。玄室の奥半分は底が露出していたし、いたるところに掘り返した跡があつて鉄片が散乱していた。

本墳は羨道部より外の部分（墓道）が公団の用地外になるため発掘調査は玄室と羨道部に限られた。

羨道部は巾 60 cm・高さ 1.1 m・長さ 75 cm で、羨道部内とさらにその外側にかけて円礎による閉塞が行なわれていた。閉塞石は 5 段、高さ 70 cm が遺存した。閉塞石群の外縁、向って左側の墓道壁に接して蓋壺が 1 点原位置と思われる状態で発見された。

玄室は巾 2 m・奥行 2.75 m・天井高 1.3 m・天井はほぼドーム状をなし、断面はしたがって略アーチ状を呈する。奥へ向って右側の袖部に須恵器長頸壺と提瓶が 1 点ずつ遺存したのはほぼ原位置と思われたが、玄室中央部を中心に散乱状態で検出された直刀や鐵錐を含む鉄器類一括は盗掘に際し打ち捨てられたものと思われる。

第4号横穴墳 本墳は本村横穴墳群中の最大規模を有している。これも玄室だけが用地内では他の用地外になるため墓道調査ができなかつたのは残念である。巾の広い（約 2 m）U字溝をなす墓道が急に狭まつて巾 1 m・高さ 1.25 m の羨道に至る。羨道の長さは 1.15 m でこの長さ一杯に円礎による閉塞が行なわれている。

閉塞の前面には黒土有機土層が厚く堆積していたが、その中には玉類や鉄片・須恵器片等が入つていてかなり古い時期に内部が一度乱されたことを示していた。その時期に関連して玄室内から古錢（宋錢）が出土したのは注目される。

玄室は隅丸の台形ともいべき平面形で最大巾 4.2 m 中心巾（4 m）・奥行 3.85 m という大きさである。天井はドーム状をなし放射状に走る整形工具の痕を残しているが周壁まで及んでいない部分が多い。断面はしたがつてアーチ状を呈する。

玄室の奥では床が露出したり流入土が浅かったりしたために盗掘を受けた部分が多かつたが、他はほぼ副葬品の遺存状態が良好であった。中央部の向って右寄りには耳環の類が、左側には玉類が日立っていた。また中央部から入口寄りにかけては須恵器の蓋壺を主体とする土器群が多かつた。また向って右側の袖部には別グループの須恵器蓋壺の一群がまとめていたのも注意された。

なお向って左の側壁に沿つて人骨片が検出されている。

以上、4 基の横穴墳についての法量を表示すると次の通りである。

	玄室長	玄室巾	玄室高	羨道長	羨道巾	羨道高	全長	方位	玄室プラン
1 号	175	270	100	85	80	(95)	(850)	N 72°W N102°W	小判形
2 号	230	250	100	53	90	90	(1000)	N103°W	隅丸方形
3 号	275	200	130	75	60	110	?	N128°W	隅丸長方形
4 号	385	400	195	115	100	125	?	N126°W	隅丸台形

() 内は推定値 単位 cm

(B 群)

本B横穴群はA群の反対側の斜面に位置し、地形的には東西に延びる丘陵が大きく南北に方向を転じた部分の東斜面に構築されている。東斜面は樹木が繁り、かつ自然の崩壊によって堆積土に厚く復れ、表面からの觀察では発見するのが困難な状態であった。東斜面に不自然な陥没が認められたので、精査の結果前庭部を共有する7基の横穴墳が構築されていた。

前庭部、丘陵頂部に近い標高40~39mの等高線がめぐる斜面を南北に14mに亘って現地表より約2.80mほどの深さに開削し、その断面に横穴墳を構築し、横穴墳の前方の斜面も基盤の地層までゆるやかな傾斜で開削している。この部分を前庭部と呼称する。

B群前庭部の全面発掘の結果、北端部に近い部分と南側とは前庭部の傾斜が不整合であり、構造を異にすることが判明した。前者を前庭I、後者を前庭IIと仮称しよう。

前庭Iは7号墳の前方に巾5mほど残存し、約30度の傾斜をもって地山まで地形に沿って掘削られている。

前庭IIの規模は南側に巾9mほどあり、標高39m附近より掘削され深さは2.80mある。前庭の平面形は方形に近く2号~5号墳によって共有されている。

前庭Iとの関係は前庭Iより若干低くIの南端を切削している。

第1号横穴墳 B群中最南位のもので前庭より40cm上った位置に構築されている。さわめて小規模で特異な構造と形態を示すもので保存状態は良好である。

構造は80cmほど掘込まれた部分が玄室に相当し、床面はさらに40cmほど外に伸び、この部分に溝状の羨道が掘られている。

玄室の平面形は胴張りの長楕円形で、天井は低く、床面は丸底で、断面形は横に巾の広い扁平な楕円形を示している。

本横穴内よりは遺物は全く発見されなかった。

第2号横穴墳 B群中本墳だけが古い時期に開口されていた。前庭から羨道にかけては堆積土が厚く、羨道前方の前庭部には閉塞石の崩壊したと思われる円礫が散乱し提瓶1個、平瓶2個その他に須恵器破片が少量出土した。

羨道天井部は崩壊しているが、羨道長さ125cm・巾85cm・高さ125cmあり羨道部一杯に大形の円礫(長径30cm前後)による閉塞が遺存していた。

玄室内部には有機質土層が堆積していたが、既に擾乱されており遺物は発見されなかつたが、地盤上に古鏡2枚が混在して発見された。

本墳の平面形は羽子板形とでも形容すべく奥壁部が最大巾230cm、玄室幅部巾145cmと急激に巾を狭めている。玄室の断面形は玄室中央の天井部高さ167cmを頂部とした山形を示している。羨道部断面形は最高部が左側にかなり片寄り不整形な不等辺三角形に近い形を呈している。

天井及び周壁には整形加工のノミ状工具の痕跡が顕著に残されている。

第3号横穴墳 本墳は未開口であったものを前庭部の全面発掘の結果発見した。

前庭断面の崩壊や丘陵頂部から流動した土層の堆積に厚く復れよく原形が保たれていた。

本墳の内部は黒色土層が羨道一杯に埋め、玄室内も奥壁に向って傾斜しながら厚く堆積していた。内部は全く擾乱された痕跡は認められないが、副葬された遺物は全然発見されなかった。

前庭より 20 cm 上段に羨道が構築され、入口の中は 55 cm で奥に向って巾が広がり、玄室に接する部分で巾 85 cm ある。羨道部の天井は大半が崩壊しているため高さは明確でないが羨道中央で 70 cm を推定される。

羨道内には大形礫を 4~5 段積み重ね高さにして 50 cm 前後の閉塞が遺存している。羨道部から玄室に移る部分は約 5 cm ほどの段をなして高くなっている。

羨道に比して玄室の規模は小さく、長さ 95 cm・巾 108 cm・高さ 87 cm を測り立方体に近い形態を示している。周壁は 50 cm ほど直立に立ち、断面形は台形を呈している。

本墳も全体的な平面形としては羽子板形に属するタイプである。

第 4 号横穴墳 第 3 号横穴墳と同様に未開口のもので、羨道には黒色土層が充満していたが玄室内にまで及ばず、玄室内には砂質土が薄く堆積していた。

本墳は前庭より 30 cm 上に構築され、羨道には高さ 50 cm 前後に大形礫を数段積み重ねた閉塞が残っていた。羨道前の前庭部に閉塞石が崩れた状態で礫がかなり発見されているので、閉塞は更に高く羨門天井部まで積っていたものと推定される。

玄室内には砂質土上層に人骨が遺存していた。頭蓋骨片が玄室奥壁中央にあり、大腿骨片が約 20 cm 離れた東側に 1 部分遺存し、人体各部位の骨片が玄室内に不規則に散乱していた。この状態より埋葬時の原位置を保っているものとは考えられない。

遺物は玄室内より直刀 1 口・刀子 1 口・鉄鎌 4 本が出土し、玄室据部より須恵器・蓋坏 2 個・高坏 1 個、その他須恵器破片が少量出土した。

横穴の規模は羨道長さ 155 cm・巾 72 cm・高さ 100 cm あり、玄室は長さ 185 cm に対して巾が 208 cm あり、天井の高さは 145 cm を測る。

平面形は 2 号墳に類似し羽子板形に属す。玄室断面形はアーチ型を示し、羨道断面形は巾に対して天井部の高さが特に注意される。

第 5 号横穴墳 本墳も未開口であった。羨道から玄室にかけて黒色土が水平に堆積しているが、床面が羨門部にかけてゆるい傾斜をなしているので羨門部では 53 cm の堆積土も玄室奥壁部では僅かに 5 cm 程度の堆積であった。

位置は前庭と同レベルに構築され羨道部に礫積みの閉塞が行なわれ、閉塞石は現在高さ 50 cm ほど残存していた。

本墳は羨門からほどなく残り最もよく原形をとどめている。

遺物は羨道奥から玄室底部にかけた位置に床面に接して須恵器・坏・蓋 6 個・台付壇・短頭壇各 1 個その他破片が出土し、玄室内部からは壇 1 個・瓶破片・土師器破片 1 拙して出土した。

いずれも原位置をいちじるしく移動しているとは考えられず、擾乱の痕跡は見当らない。

平面形はいわゆる羽子板形に属すが、規模は全長 380 cm・羨道の長さ 185 cm・巾 95 cm・天井部高さ 145 cm ある。玄室は長さ 195 cm・巾 198 cm と平面形は正方形に近い。断面形は玄室・羨道共に天井中心部が高く山形に近い形態を示している。

床面は羨道から玄室に移る部分が 10 cm ほどの段を成している。周壁及び天井部にノミ加工の痕跡をとどめているのは他の横穴と同様である。

羨門部から左右に扇状に開き前庭を形成しているが、特に向って右側は前庭 II の北縁をなしている。本墳は前庭 II の北端に位置し第 1 号～第 5 号墳までが前庭 II を共有している。

第 6 号横穴墳 本墳は B 群中最も高い位置に構築されており、前庭 I より 180 cm 上に位置し前庭 I と直接的な関係は見出せない。

自然の崩壊が最も激しく玄室部の天井の 1 部を残すのみで他の部分は崩壊し深い堆積土に埋っていた。

遺物は全く出土していない。

玄室の平面形は奥行 100 cm に比して巾 210 cm を示し、横位の梢円形である。天井部も 105 cm とあまり高くないため断面形も梢円形を呈している。羨道部は破壊されているので規模・形態は不明である。

第 7 号横穴墳 B 群中北端に位置し、本墳も隣接する第 6 号墳と同様に崩壊が激しい。天井は玄室部のみ残存し、羨道部は崩壊している。本墳の前庭は前庭 I と仮称したもので、1 号墳～5 号墳前庭とは異なる構造を示している。

羨道の長さ 205 cm・巾 85 cm を示し細長い羨道を有するタイプである。前庭部に約 40 個の閉塞石が崩壊しているので閉塞も行なわれていたことは明らかである。

本墳の平面形・断面形ともに 2 号墳～5 号墳と同形の羽子板形、山形を示している。

遺物は全く出土しなかった。

B 群の各横穴墳について概要を述べたが、各横穴墳の精細な数値は次の表を参照されたい。

△	玄室			羨道			全長	方位	玄室プラン
	長	巾	高	長	巾	高			
1号墳	80	55	35	40	30	20	120	N 80 E	小判形
2号墳	228	228	167	125	85	120	353	N 80 W	羽子板形
3号墳	95	108	87	130	85	(70)	225	N 51 W	"
4号墳	185	208	145	155	72	100	340	N 57 W	"
5号墳	195	198	145	185	95	145	380	N 44 W	"
6号墳	100	210	105	不明	?	?	?		横楕円形
7号墳	155	235	160	205	85	?	360	N 45 W	羽子板形

2. 本村古墳

第1号墳

墳丘は基径 11m・高さ 2.2m の円墳としての体裁をとっているが、大部分は自然丘を削り整えたものであって、封土の部分は径 5~6m・高さ 60cm しかない。

墳頂下 35cm~50cm で三つの遺物群が検出された。これをそれぞれ北主体・中央主体・南主体と呼称したが、その後中央主体の直下から土壤状の掘り方が現われたので中央上部主体と下部主体という表現を用いた。さらに下部主体には細長い副主体が隣接している。副葬品のあり方をみると、中央上部主体と呼んだ遺物群中土師器の散乱状態は大いに気になることであって、これは下部主体に劍1口を副えて死者の埋葬を済ませたあとその直上に鉄鎌やガラス玉を置きさらに土師器を一部破碎してこれらの上にふりまいたというような関係を想定させるものである。したがって、中央主体を上下二主体に分けるよりはこれらを一連のものと見て中央主体部と考える方が妥当と思われる。

中央主体の掘り方は上縁で長さ 209cm・巾 46cm・下底部で長さ 188cm・巾 36cm、深さは上縁から約 40cm・墳頂から 130cm である。主軸は S82°E でこれと並行して南側に副主体がある。副主体は上縁長 265cm・同巾 30cm、下底部長 248cm・同巾 27cm で、深さは上縁から 12cm・墳頂から 100cm である。

北主体は鉄鎌 2本の出土によってそう名付けたが、遺構としては確認していない。

南主体は直刀 1口の周囲に鉄鎌と刀子がまとまって出土し、その南側で掘り方の一部と思われる部分を確認しているが、遺構としてのまとまりは把握できなかった。

なお、これらとは別に須恵器壺の破片を墳頂と斜面でそれぞれ 1片ずつ採集している。

第2号墳

墳丘は第1号墳と同様自然丘を極度に利用して作られている。基底径 7.5~8cm・高さ 1.4m であるが、積土としては径 5m 位 高さ 40cm 程しかない。

墳頂下 50cm 前後から巾 80cm・長さ 335cm の掘り方が発見され、その東端近くから鉄鎌らしい鉄製品を発見している。

本墳においても主体部の直上付近から土師器の破片を若干検出しておらず、北側の墳丘斜面では須恵器（器形不明）片を得ていることも付記しておこう。

C 出土遺物

1. 本村横穴墳群

* 未整理部分があるので、数値は概数を示す。

品名	古墳名					A 群					B 群					合計
	1号	2号	3号	4号	小計	1号	2号	4号	5号	前庭	小計					
武器類	直刀			一括		1			1		1				1	2
	刀子	1	1		2	1			1		1			1	2	
	鉄錐	7			10				4					4	14	
身具類	耳環				8	8										8
	勾玉	8	1		4	13										13
	管玉	9				9										9
	轡玉		1			1										1
	切子玉	7	1			8										8
	白玉	2				2										2
	丸玉	2	1		9	12										12
	小玉	26	7		33											33
須恵器類	高壺				1	1				1				1	1	2
	蓋壺	2		2	25	29			2	7				9		38
	提瓶			1	1	2			1	1			2		4	
	平瓶				3	3				2			2		2	5
	壙	1		1		2							2		4	
	脚付壙	1			1括	1括				1			1		1	2
土師器	高壺	3			2	5							1括			5
	壺	1				1										1
	壙	3				3										3
	鉢	1				1										1
雲珠					1	1										1
不明鉄器		4		3	21	28				4				4		32
古銭					1	1			2	3				5		6
合計		78	12	8	79	176			2	16	11	3		点32		点208

この表によって次の点が指摘される。

1. A群の方が一般的にいってB群よりも質量共に優れている。
2. 直刀はA群第3号墳とB群第4号墳以外に見られない。
3. A群中では第3号墳だけが装身具類を副葬していない。
4. A群第4号墳とB群第2号と第4号墳には中世になって人が出入した痕跡がある。
5. A群第4号墳にはかなり多人数の追葬があったと推測される。

1. 本村古墳(第1号・第2号)

第1号墳 北主体.....鉄 鋼 2

中央主体	内	鉄 剑 身	1
	上部	鉄 錠	7
		ガラス小玉	16
		土師器高坏	1
		土師器壺	1
	(土師品片若干)		
中央副主体		無 し	
南 主 体	直 刀 身	1	
	鉄 錠	8	
	刀 子	2	
	管 玉	1	
埴 丘	(須恵器瓦片	2)	
	破片を除く合計 40点		
第2号墳 主 体 部	鉄 錠?	1	
	(土師品片若干)		
埴 丘	(須恵器瓦片若干)		

以上の出土品各々についての記述は後日の正報告にゆずりここでは割愛する。

III. 考 察

1. 本村横穴墳群

A 構造について 横穴墳は丘陵の中腹に掘削される。その場合トンネルを掘る場合と同様に横穴墳の規模に応じて丘陵を削り取る必要がある。この部分を通常「前庭部」と称するが、本村横穴墳群の場合A群とB群とで、この前庭部の構造が大きく違っている。

A群では1基ごとに巾1~2mの滑状の掘り方が6~10m程の長さに掘削されている。これは前庭部と呼ぶにふさわしくない。そこで我々はこの部分を墓道と呼ぶことにした。しかし、天井部の有無にかかわりなく玄室(墓室)にいたる道を墓道というのであれば、墓道と葬道は同義語である。したがって、玄室への入口に短かいトンネルの掘られている部分を葬道と称すると、同義語で別の施設を呼ぶことになるわけである。しかし、他に適当な語がないので天井のある部分を墓道、無い部分を葬道ということばで暫定的に表現し適当な用語があつたら呼び換えようと思う。

A群に見られた墓道に類するものはB群ではなく、そこには14m×7mの文字通りの前庭部が作られている。各墳はこの前庭部を共有している形になるわけである。

次に葬道部についてみると、A・B両群共に極めて短かい。この部分には円礫を積んで閉塞が行なわれている。B群ではこの閉塞は葬道一杯に石をつめ込むことで足りたらしいが、A群では

例えば第1号墳のように羨道内だけでなく一部羨道の方まではみ出すこともあったようである。

また、A群の羨道部では注意すべき構造がみられた。第1号と第2号の横穴墳で羨道側壁から底面にかけて垂直方向の溝が彫りこまれていた。その構造から推測されることは、そこに板石か板木による蓋がはめ込まれたのではないかということである。しかし、発掘結果では板石の発見がないばかりか、第1号墳では閉塞石群がこの溝とは無関係と思われる状態で積みあげられていた。もしこれが木質であったとすると、その内と外の両側に石積みが行なわれたということになる。これを復原的にのべれば、閉塞に当っては先ず羨道の溝より奥に円礎をつめ込む、次に板木か丸太材のような木質のものを溝にはめ込んで蓋をする、最後にこの木質の蓋をおさえるような形でその外側に円礎を積みあげる、というような手順であったと考えるわけである。この場合でも遺存した円礎群の状態には納得のゆかぬ点がある。後考をまとうと思う。

最後に玄室については、A群内では互いに共通性が認められるが、B群との関連では大きな差異がある。

まず、平面形からみるとA群では奥行よりも巾の大きいのが目立つ。第3号墳では奥行の方が大きいとはいへ平面形としては他の3基に類似している。第5号墳～第7号墳も同じ特徴をもっている。四隅は丸味をもち天井はドーム状を呈している。天井と周壁の整形は極めて粗雑でノミの痕をたくさん残している。B群をみると、第1号墳は特別扱いをするとして、第6号墳はA群のものによく似た作りをしている。平面形ではA群第1号墳に極めてよく類似している。B群第6号墳は一番高位置に営まれており羨道部より外を破壊されている。これはB群の前底部を作る際の犠牲になったためと思われるふしがある。A群との構造的共通性と共に今後検討を要する点である。

B群の他の横穴墳（第2～5号・第7号墳）は相互に共通性がみられる。平面形は羽子板状を呈すること、横断面は山形をなして巾に比し高いこと、天井から周壁にかけては巾広い桶状の整形痕が見事に残っていること等である。大きさも一般的にいって小さい。

以上要するに、A群とB群とは構造的にも別の群をなし、B群6号墳のあり方から見て、A群の方が年代的に先行するらしいことが推考されたのである。

B 年代について 遠江地方の横穴墳に関する研究はようやくその緒についたばかりである。したがって構造上からその年代を推定することは未だむづかしい段階である。しかし手がかりがないわけではなかった。偶然の機会であったが、39年に掛川市の屎尿処理場工事現場で1基の横穴墳が発見された。それは構造的にも副葬品の内容の点でも極めて特異なものであったが、玄室の作りや羨道の構造に関しては本村A群と共通する点が多い。特に羨道部の構造ではA群第1号と第2号横穴墳との関連性が強く認められている。そしてこの点に関しては別稿で詳しく述べることにならうが、この共通性は遠江の横穴墳としては最も古い段階を示すものと考える。

次に副葬品についてみると、須恵器の副葬が認められるのでその年代から横穴墳の年代を推測することができる。それによると、A群には第Ⅲ型式のものがあって、稀に第Ⅳ型式前半のもの

を含んでいる。これに対してB群では第IV型式後半のものに限られている。

第III型式を更に細分して考えると下表のようになる。

		A 群				B 群		
		1号	2号	3号	4号	前庭部	4号	5号
第III型式	前葉	○	?		?			
	中葉			○	○			
	後葉							
第IV型式	前半				○			
	後半					○	○	?

したがってA群は少なくとも6世紀中葉頃には成立していたことが推定されるのであり、第1号墳については6世紀中葉をややかのぼることさえも可能である。先述した屎尿処理場内発見の横穴墳（宇洞ヶ谷横穴墳と称する）からも第III型式前葉の須恵器が出土しているので構造上の共通性はこの点でも再確認される。

C 群構造について 以上構造と年代について簡単に述べたが、最後に種々な要素を組み合せて群の構造を分析し、群成立の過程に解決の糸口を与えておこうと思う。

A群中第1号墳と第2号墳は墓道の主軸を等しい方向に向けている。墓道の構造も共通し、玄室の形態も類似している。年代的にも1号墳は第III型式前葉にさかのぼる。副葬品がないので年代の確認はできないが、B群の第6号墳もこれらと共通している。この3基が先ず最初に現われたとして良いだろう。

次にA群第4号墳を中心として第3号墳と第5号墳（未調査）が主軸と標高をほぼ等しくするうえ構造的にも似た点が指定される。年代としては第III型式中葉と推測されるが、第4号墳中にてはややかのぼり得る蓋壊が認められる。

A群第6号～第8号墳は未調査のため年代は把み得ないが、第7号墳（最大）を中心におき共通の前庭部をもつらしいことが判っている。

B群は第6号墳を除き前庭部を共有している。副葬品中にも年代差を示す資料が無い。しかし、第7号墳は1基だけ高い位置にあってやや外れた感がないでもないが、これはひとまずB群として一括してみよう。こうしてみるとA群はさらに3つの単位群に分けられる可能性が出てきたわけである。

2. 本村古墳（第1号・第2号）

- ① 占地としては丘陵の頂にあり日につく位置を占めている。
- ② 自然丘を大いに利用し大きな墳丘と見せかけている。
- ③ 主体部は基盤を土壙状に掘り込んで作られている。
- ④ 主体部の直上に土師器を散布した形跡がある。

- ⑤ 副葬品中には劍が含まれており、鉄錐の型式も古調を帶びている。
- ⑥ 須恵器は破片のため型式判定がむつかしいが、第1号墳出土のものは第Ⅲ型式まで降らないと思われる。

これらの諸点から、この二古墳は中期から後期にいたる過渡期の古墳と考えられる。最近遠江ではこの時期（つまり5世紀末～6世紀初頭）に含まれる小規模古墳の例が段々と確認されつつあって、その数は相当多いことが予想される。このことは後期の群集墳（横穴墳も含めて）の成立過程を解明するために重要な手がかりとなるだろう。

図版 1 本村横穴墳群の調査 その 1

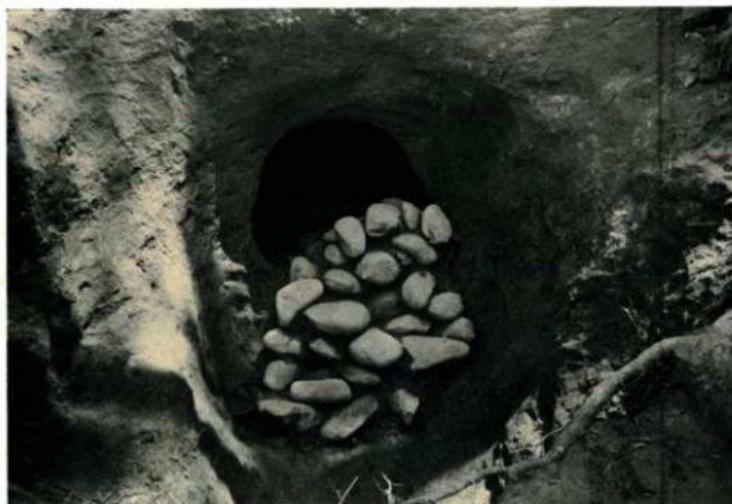


A A群1号穴全景

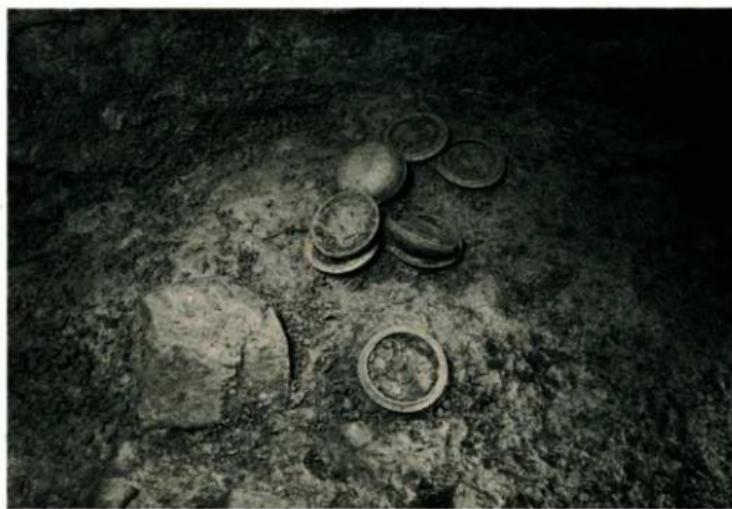


B A群1号穴遺物出土状態

図版 2 本村横穴墳群の調査 その 2



A A群3号穴閉塞部



B A群4号穴遺物出土状態

図版 3 本村横穴墳群の調査 その 3

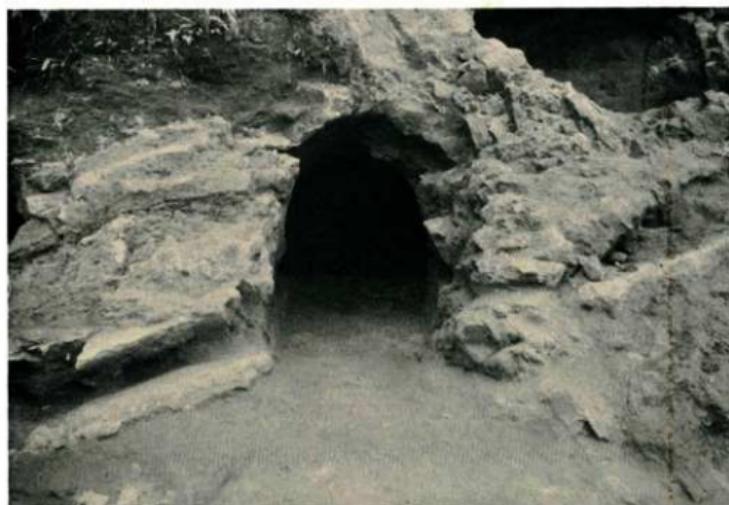


A B群全景（調査前）

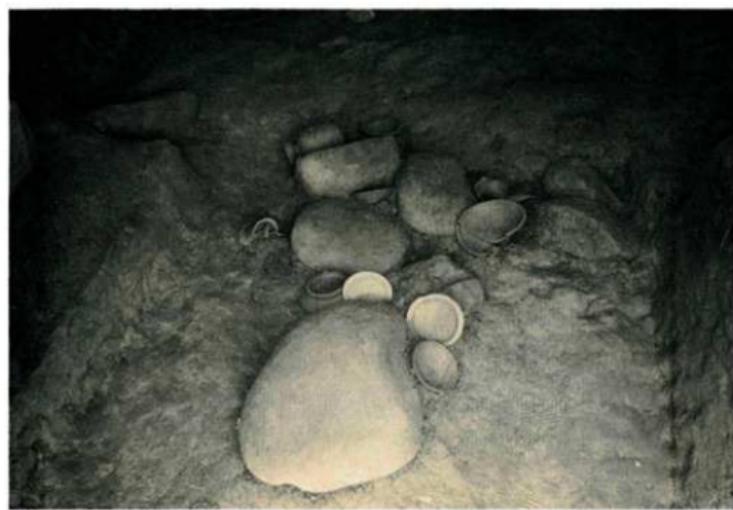


B B群全景（調査後）

図版 4 本村横穴墳群の調査 その 4

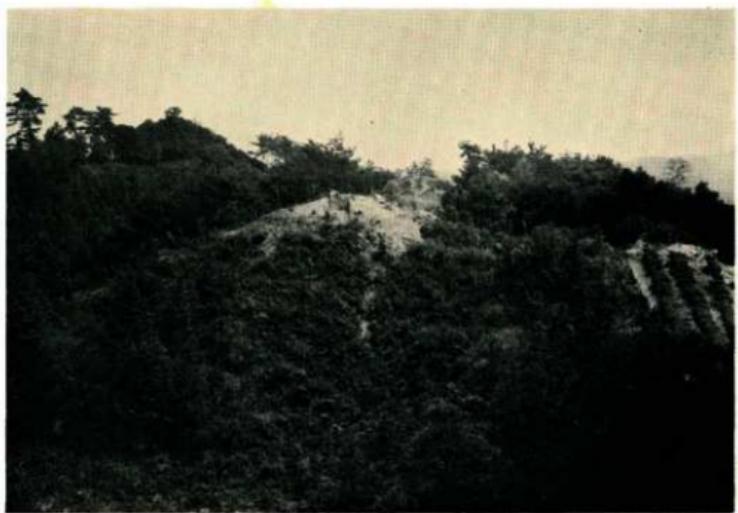


A B群号5穴全景

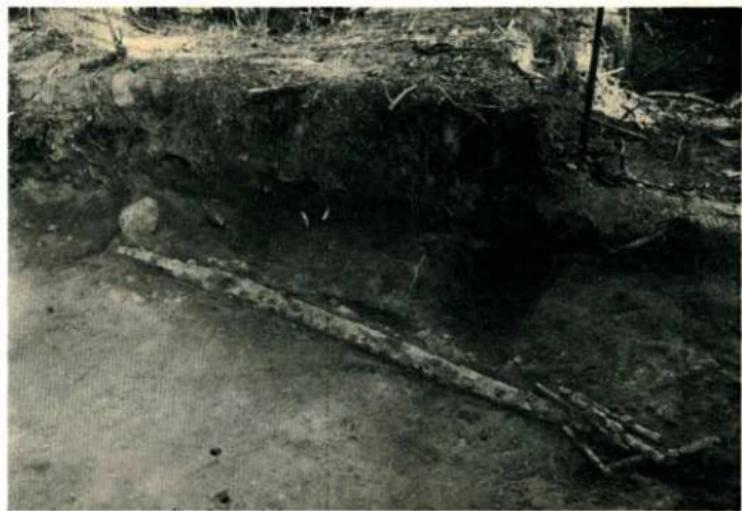


B B群5号穴遺物出土状態

図版 5 木村古墳（第1号・第2号）の調査 その 1



A 第1号墳（右）・第2号墳（左）全景



B 第1号墳遺物出土状態

図版 6 本村古墳（第1号・第2号）の調査 その 2



A 1号墳主体部全景



B 2号墳主体部全景

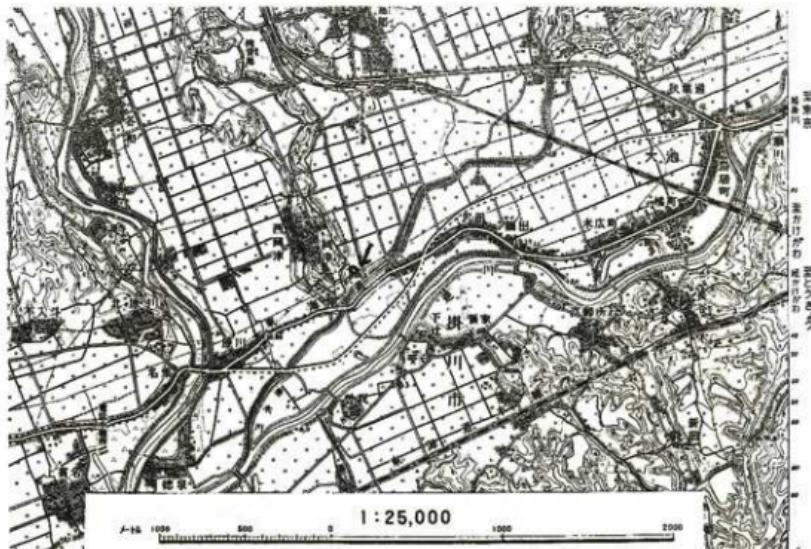
掛川市向山古墳（第2号）発掘調査概報

—東名高速道路建設に伴う発掘調査—

掛川市向山古墳（第2号）発掘調査概報

—東名高速道路建設に伴う発掘調査—

1. 所 在 地 挂川市岡津字向山 325 番地—42・43・44・46
2. 調 査 期 間 昭和41年8月17日～昭和41年8月26日
3. 調 査 主 体 日本道路公團
4. 調 査 者 静岡県教育委員会・掛川市教育委員会
5. 発 掘 担 当 者 大谷 純仁（執筆者・同左）
6. 参 加 者 尾藤 院・増井 義昭・後藤 武哉・田端 勉・鈴木 忠司・西田 正弘・寺田 和夫・向坂 鋼二・掛川東高校郷土研究部・磐田南高校郷土研究クラブ・浜松女子商業高校社会科クラブ・誠心高校郷土研究クラブ・中達工業高校郷土研究部・横須賀高校郷土研究クラブ・磐田北高校社会科クラブ・袋井商業高校社会科クラブ・掛川西高校郷土研究部・磐田商業高校郷土研究クラブ



掛川市向山古墳位置図

調査の概要

I. 経過

調査は樹木・雑草の伐採より始まり墳丘及び周辺地形測(20 cm 等高測量、50 分 1 図の平面実測)の事前調査を行ない、墳丘調査に続き墳頂点において交叉する巾 1 m の二本のトレンチを設定し発掘調査を行なった。発掘過程において問題となつた事実について若干触れながら結果を整理すると、伐採によって輪郭を現わした墳丘は築成後において何等かの事情で原形をとどめないとさざされたものであつて、盛土で周辺より約 1m 程小高くなっている所から古墳と認める事が出来る程度の保存状態であった。このことは発掘の進むに従つて認められたのであるが、当初墳頂部より東裾にかけ存した葺石と思われた小礫群は、墳頂部の凹部に捨てられた附近の小礫であり、その充厚は墳頂部において部分的には基底部に達したものであった。この様な状態における本墳の主体部の存在は既に消滅したと認めざるを得ないものでもあった。墳丘封土内より検出された副葬品と思われる品としては、須恵器の破片數十片が検出されたがこの出土位置は大半が前述の礫群及び攪乱層の出土であつて築成時の位置よりの検出は皆無であった。又墳丘全体特に墳丘裾部においては 10 ケ所より中世以降における火葬骨の納骨に利用された箇所が検出されるに至つた。この時期の出土品としては墳頂部において鎌倉期の銅鏡片・鉄劍が伴出し、その附近において古瀬戸製合子片 3 点が検出され、南側墳裾において 4 個の躰囲内に骨蔵器として利用した古瀬戸製鉢型土器 1 個体分が検出された。今回の調査において最も興味を有する結果となつた事実として、古墳築成に際して基盤に輪郭壁を施した後に盛土を行なつたと思われる点、墳丘のほど中心と思われる基盤部に主軸をほど東西にする溝状遺構が検出されたことである。これらについては後述したい。

II. 概要

A 地形

本墳の位置する地形は、西方に原野谷・南方に逆川が存し、その間に形成された沖積地のほど中央部に南北に 2.3 km・東西に 300 m ほどの独立段丘を形成している。この段丘は通称岡津原と呼ばれ段丘上は比較的平坦地に恵まれ古くより茶産の盛んな所でもある。

現存する遺跡は、縄文文化遺跡 1・弥生文化遺跡 1・古墳文化遺跡 16 を数え原野谷川の西岸に位置する和田岡原と共に考古学上貴重な地域でもある。

本墳はこの岡津原古墳群中最も南端東側に占地し、隣接する第 1 号墳及び既に消滅した 2・3 基の古墳と共に一つの支群を形成している。

B 遺跡概要

古墳は附近に存在するものと外形・立地などの様相などにおいて異なるものでなく、墳丘はいわゆる円墳と称せられるものである。外形から見た墳形は原形を著しく変形している。

調査の結果より得た墳丘の規模は築成時における輪郭壁の上壁より計測すると南北経に 11 m・東西経に約 13 m・高さ 1.15 m 内外の規模を有する円墳である。墳丘は墳頂より東側にかけ造出部の施設を有する古墳の如き様相を示すが、断面調査で確認した結果では後世の人為的動力によるものであり、築成時の経 11 m 内外の円墳であったと思われる。

外部施設としての葺石・埴輪等の施設はなく、一般的に古墳の裾をめぐる周濠とは趣きを異にすると考えられる施設として輪郭壁（仮称）が、墳丘西側を中心に半円形に発見された。当施設の性格を求めるに古墳築成時において基盤を形成する際地形的に斜面を利用した場合（本墳は基底において東側へ緩やかに傾斜する）、墳丘の外形を整える意味で傾斜する高位の所を整形したであろうことが推察出来る。この観点において本墳のそれを観た場合、輪郭壁の末端部は緩やかな曲線を描きながら東縁部の地山に接して加工跡は消えてしまう。

墳丘を形成する盛土は前述の基盤上に褐色土層 20 cm~30 cm、次に黒色有機土層 30 cm~42 cm が盛られているが、それより上層は人為的擾乱が著しく部分的に褐色土層・黒色土層の混入が認められ、それより表土に至っては疊に有機土層が混入している。このような状態における主体部は墳頂部を中心に広範囲を基盤まで下げる所以であるが検出出来なかった。換言すれば、本墳の主体部埋葬施設が盛土内に架設されていたとすれば、擾乱時に破壊されたものと考えられ、擾乱層において検出された須恵器の一群は埋葬時には主体部附近に副葬されたものであろうと推定するものである。

基盤部において確認された溝状造構は長軸をほど東西に向いたもので、計測値は長さ 5.4 m・巾 90 cm~105 cm・深さ 15 cm~20 cm を測る規模である。この造構内より出土した品は土師器の細片 3 片と西端壁に床面より僅かに浮いた状態で五輪石の下三輪部分が検出された。

他に本墳とは関係ないものであるが墳丘裾部の南裾で 6 体分（内 1 体は藏骨器）・北裾で 3 体分・東側で 1 体分の計 10 体分の火葬骨が検出され、墳頂部においては墳頂より約 30 cm 下部において鉄劍半個体・銅鏡（葡萄鏡）4 分 1 個体が検出され、またそれより 10 cm 程上部の疊層内において合子片 3 片が検出された。本墳西側から 6 m 程西方の表土より 15 cm 程下部において須恵器（擬宝珠状把みを有する坏蓋）が検出されたが本墳とは関係を異にするものであろう。

以上の如く本墳においては石室用石材・内部主体・副葬品の検出は不可能であった。

C 出土遺物

本墳から検出された遺物は須恵器壹型土器片・須恵器坏蓋・銅鏡片・合子片・鉄劍片・骨藏器である。

須恵器壹型土器片 口縁部から観ると、口縁部に 1 条の突帯で飾り頭部の短かい壹である。

胴部は破片から推察すると全体にたたき文が施され、内部には青海波文が認られる。焼成は非常に良好で黒味をおびている。

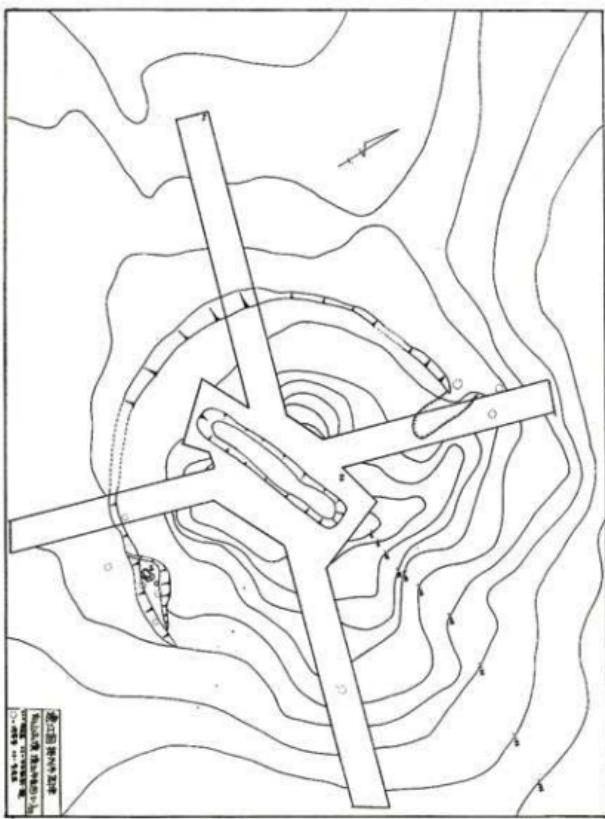
須 恵 器 杯 蓋	擬宝珠状把を有する杯蓋で口径 14 cm を測るものである。
銅 鏡 片	破片の状態から縁て葡萄鏡と称せられるものであろう。外区の部分に 5 球の葡萄模様を施した部分が銀られる他は不明である。
合 子	古瀬戸系のものと思われる胸部 3 片である。
鉄 剣 片	茎と身部は間から 5 cm 程で、その先は検出できなかった。茎の長さ 10.2 cm・身の幅 3.8 cm である。
骨 蔵 器	古瀬戸系のものと思われる鉢型の器形で器高 15.8 cm・口径 15 cm、器表側は縁袖が施されている。

III. 考 察

古墳の年代的序列を決定する足掛りとなるべき副葬品の検出が須恵器型土器片のみであって、築成年代を決定づけるには困難であるが得た資料をもとに考察すると、

1. 立地的には段丘突端部に位置し、群集墳であること。
2. 内部主体が不明ではあるが石室を架設したと思われないこと。
3. 出土した須恵器型土器片中口縁部の造りが須恵器編年の中からも比較的古い時期にその類例を求めることが出来ること。

以上の観点で本墳を推察すると、1. に対しては群集立地する初期の時期を中期後葉に考えられる点、2. については石室を架設する初期の古墳は遠江において後期前葉後に考えられる点に、3. の須恵器編年で前述の型土器の出現が第三型式以前であることを前提として考察すると横穴式石室内に副葬される須恵器が第二型式以降からと考えられる所からすれば本墳をそれ以前に求めることが可能であり、あえて時期を与えるならば 6 世紀初頭に本墳の築成を求めるものである。



図版 1 向山古墳（第2号）の調査



A 墓丘全景



B 南墳丘裾出土の藏骨器

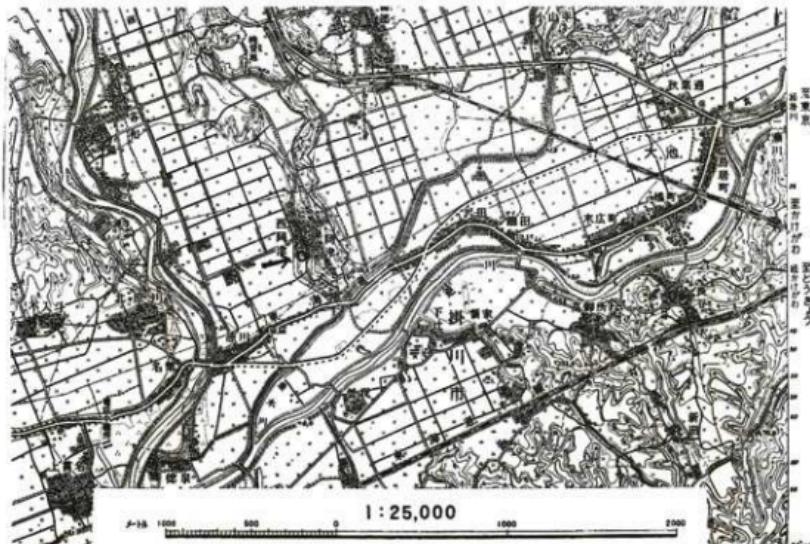
掛川市西岡津古墳発掘調査概報

—東名高速道路建設に伴う発掘調査—

掛川市西岡津古墳発掘調査概報

—東名高速道路建設に伴う発掘調査—

1. 所 在 地 静岡県掛川市各字西岡津 965 番地-1・2
2. 調 査 期 間 昭和41年8月17日～昭和41年8月26日
3. 調 査 主 体 日本道路公団
4. 調 査 者 静岡県教育委員会・掛川市教育委員会
5. 発 挖 担 当 者 山村 宏(執筆者・同左)
6. 参 加 者 鳥 竹秋・大崎 卉夫・宮本 豊彦・外山 和夫・平野 和男・池田 純・柴田 稔・安達 荘三・駒宮 史郎・佐久間高校郷土研究部・掛川西高校郷土研究部・掛川東高校郷土研究部・浜松女子商業高校社会科クラブ・誠心高校郷土研究クラブ・磐田南高校郷土研究クラブ・磐田北高校社会科クラブ・中遠工業高校郷土研究部・磐田農業高校郷土研究部



西岡津古墳位置図

調査の概要

I. 経過

調査はまず墳丘と裾の部分一面を覆う茶畑の茶の木刈り取り作業から始まった。墳丘測量は25cmの等高測量で縮尺100分の1の平面実測図を作成し、東西20m・南北20m・巾1mのトレンチを墳頂中心部で交叉する様に設定した。さらに墳頂平坦部には一辺6m四方の発掘区を設けた。発掘区は附図に示したごとくA区～D区、トレンチは1～4トレンチとした。発掘作業はA～D区を平面的に掘り下げ、トレンチ内は墳丘堆積土層序を究明することを目的として進められた。各調査区は作業の進行につれ表土層を除去した頃より層位は乱れ部分的には特に変化が著しく擾乱された状態が認められた。出土遺物も弥生式土器片・須恵器片と共に中・近世の陶質土器片等が多数発見された。表土層の下に黒色有機土層があるが層内は全域にわたって混乱されており、中世陶質土器片・弥生式土器と併せてガラス製小玉・鹿角装刀子柄頭残欠・鉄製斧頭等本古墳に埋葬されたと推定される遺物が混同して発見された。もちろん遺物は一括されて発見されたものでなく各々が単個体で散在していた。しかし埋葬構らしきものを検出することはできなかった。墳頂より約1m掘り下げたところ初めて安定した黒色土層を発見した。この面を切り込んで次の黄褐色土層に及ぶ不定形の溝状遺構をD区・1トレンチ・A区で発見し、続いて3トレンチ・B区において溝状遺構に接続する深い掘り込みを発見した。しかしこれら遺構に充满する土層は擾乱された黒色有機土層であり、遺構面から発見された遺物も弥生式土器の細片と陶質土器片等若干があった。

II. 概要

A 地形

掛川市の西方、国鉄二俣線の遠江桜木駅西南に小高い独立丘陵（岡津段丘）が眺められる。信州街道が北進する東側に面した細谷・富部集落が所在する細谷丘陵と対面する谷岡・高田・各和等の集落が形成される和田岡丘陵の冲積地内に独立する当岡津丘陵はかってその両丘陵のいすれかの部分に接続していた段丘であることが推察出来る。

岡津段丘は南端の富部川に面する辺りで標高28.5m・北端部附近で46.3m、全長は2.3kmの段丘である。原野谷川に面する段丘の西側は階段状の浸蝕段丘が発達している。北端部が一番高く、中央部は北端より一段低くなつて2段丘が認められ、更に西岡津集落の形成される辺りで2段に発達している。合計5段階の浸蝕面が認められる、段丘南端は富部川に接し、東側は垂木川冲積地に面している。

本古墳は西岡津集落の南端にあり岡津段丘南端西側に位置している。墳頂部は標高24.6mの

高さであり、水田との比高は 8.5 m の部分である。

B 遺跡概要

岡津段丘の西側縁辺部には河岸段丘が発達していることを地形の項で述べたが、本古墳の立地する部分にも小さな段丘が認められる。古墳は西岡津部落の形成されている第2段丘から第1段丘に移行する縁辺部に築成されたものであり、墳丘の西側面は第1段丘にやゝ流れ込む状態であった。第1段丘と第2段丘との比高は約 2 m である。墳丘は高さ 1.5 m・直徑南北 16.5 m・東西 13.8 m を測る円墳である。墳頂より墳丘を観察すると南面部が細長く延びている。これは附近住民の話を総合すると、昔小祠があり南面の墳丘の延びている部分に階段が設けられていたとのことである。墳丘には蓋石・埴輪等の施設はなく墳丘をめぐる周濠も発見出来なかった。墳丘を形成する盛土は段丘の基盤である第Ⅲ期洪積層（砂礫土層）を基にしてその上部を第3層の黄褐色が 50~60 cm 積み上げられ、次に第2層が黒色土であり 15~20 cm の厚さに盛られている。第1層は黒色有機土が 50~60 cm あり、表土層が 30~40 cm の厚さで覆われている。墳丘断面を観察すると、表土層は一般的に見られる層よりやゝ厚く全面が擾乱されている。第1層の黒色有機土層も全面が擾乱され第2層の一部まで人為擾乱が認められる。木墳で確認できた擾乱は3期に及んでいる。第1期は黒色有機土層が全体的に動かされ黒色土層と黄褐色土層の一部を切り込んだもので、別図に示したごとく溝状造構と長方形掘り込み造構が形成されている。溝の延長は 7 m・巾 50 cm・深さ 20 cm あり、掘り込みは巾 1.5 m・長さ 2.6 m・深さ約 60 cm のものである。掘り込みから更に続く溝は第2トレンチ内で発見した掘り込み造構に接続するものと推定される。造構面から発見した遺物は弥生式土器片と中世陶質土器片がある。

本古墳の主体部埋葬遺構はおそらく、この第1期擾乱によって破壊除去されたものと推定される。それは本古墳の埋葬遺物と考えられるガラス製小玉・鹿角装刀子柄頭・鉄製斧頭等はこの擾乱層内から出土上面を共にせず散在的に発見できたことからも推察できよう。第2期の擾乱は墳丘西面から南面にかけて墳丘の約 4 分の 1 が大きく削除され、その跡に砂礫及び中・近世陶質土器片等の廃棄物を埋め込んで墳丘を修復している。第3期の擾乱は表土層全面におよび中・近世陶質土器片・寛永通宝・陶磁製福荷大明神・燭台・須恵器片等が発見できた。以上の結果から本古墳が中・近世までの長期間にわたって数回の擾乱があり墳丘の大半を変形させるほんらかの動機のあったことが伺われる。

C 出土遺物

本古墳から発見された遺物には身体装飾用品と鉄製品の若干がある。

ガラス製小玉 淡紺色を呈しており、直径 8 mm・厚さ 4 mm・孔径 2 mm の通孔面が平らになったものである。

鹿角装刀子柄頭 全長 6.7 cm で鹿角装柄頭の部分は 5.5 cm あり、刀身がわずかながら残存している。刃巾 1.7 cm・厚さ 4 mm あり酸化もさほど進行していない。

鉄製斧頭 全長 7.2 cm で刃部は欠損している。脇部の巾は 2.7 cm・厚さ 1.5 mm

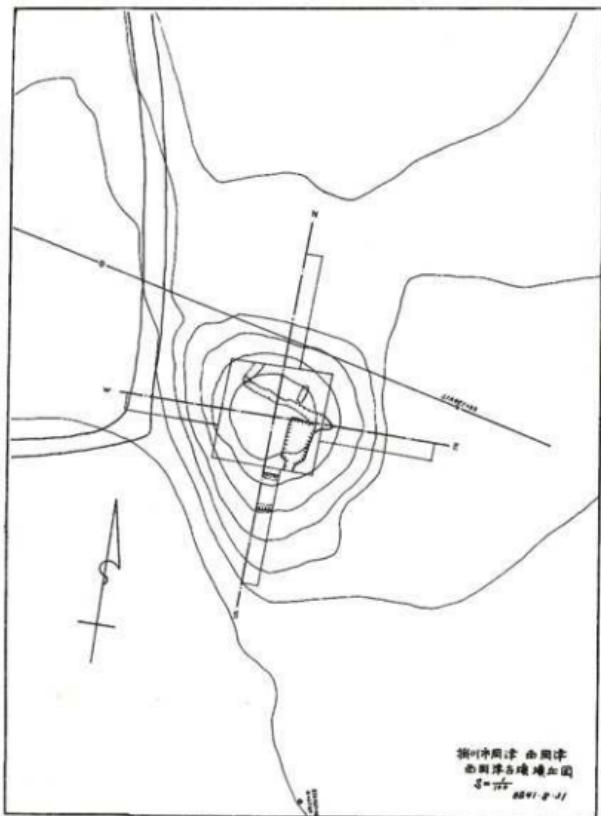
あり、ふくろ部の長さ 2.5 cm・内径 1.1 cm の小型斧頭である。

III. 考 察

昭和 15 年に編纂された静岡県史第 1 卷に岡津古墳出土の平縁飛離走獸文帶神獸鏡が紹介されている。この同型鏡は全国 10ヶ所で発見されており、古墳時代中期から後期初頭の時期に考えられる年代のものである。当岡津段丘には岡津原 1 号墳・神明塚古墳と大規模の円墳が所在する。次に本古墳が規模の面からあげることができる。前述の神獸鏡を出土した古墳は不明であるが、古老から伝承されているには神明塚だとされている。しかしその確認はなく本古墳から出土した可能性も一応は考えなくてはならない。調査にあたってはその点を特に注意したが、調査結果は残念なことに 3 期に及ぶ人為的擾乱のため埋葬主体部等の遺構を明らかにすることはできなかつた。わずか 3 点ではあるが本古墳に埋葬されたと推定されるガラス製小玉・鹿角装刀子柄頭・鉄製斧頭等はいずれも出土する時期がこれまでの学問的研究で明らかにされている。その相対年代は 5 世紀終末の前後と推察して差しつかえないだろう。また本古墳が段丘の平坦面に立地する条件と、独立して築造される時期を前述年代の範囲と考えられよう。

出 土 遺 物 一 覧 表

A	区	弥生式土器片・ガラス製小玉・須恵器壺破片・中・近世陶質土器片・素焼 小皿・自然礫穴あき石
B	区	弥生式土器片・中・近世陶質土器片・一石五輪塔転用砥石
C	区	中・近世陶質土器片・近世外耳鍋土器片
D	区	弥生式土器片・須恵器壺破片・近世陶質土器片・素焼小皿破片・寛永通宝 陶磁製福荷大明神・陶磁製燭台
1	ト レ ネ チ	弥生式土器片・鉄製斧頭
4	ト レ ネ チ	中・近世陶質土器片



凡例 三 表土层 111 混乱层 1111 混乱砾层 111 黑色土层 11 黄褐色土层 111 破面基底

図版 西岡沢古墳の調査



A 墓丘全景・北東より望む



B A区西壁断面近景



